

高校生の部

最優秀賞

糸が紡いだ旅立ち

早稲田大学高等学院

おかのや
岡野屋
じょう
丈

中学三年生になった四月七日、僕は新しいクラスに座っていた。新しい先生がドアを開けて入ってくる。すると、先生の後に続いて転校生がやってきた。小柄な女の子だった。クラス全体が浮足立ったのが分かった。

その子は、驚くほど華奢だった。髪はきちんとして切り揃えられ、眼鏡の奥からは子供のようになつて純粋な瞳が覗いていた。黒板の前に立つと、その華奢な姿とは似つかない大きな声で、

西野です、よろしくお願ひします、と言った。その子の席は、僕の隣と決まった。

彼女は言うなれば、教室という太陽系の中心で燦然と輝く太陽だった。いつも笑顔で、ただそこに居るだけでクラスを明るくしてしまう、そんなパワーがあった。彼女の行動は、時折僕らの予想を超えていた。授業中にも関わらず、折り紙を折って先生に見せたりしてた。彼女の突拍子のない行動の数々が、クラスメイトだけでなく、先生までも笑顔にした。

特に、彼女がぬいぐるみを教室に持って来た時は、その突拍子の無さにクラス全員が笑った。両手で抱えられるくらいの、クマのぬいぐるみ。八歳の時にね、お母さんから貰ってね、宝物なの。彼女はこの上なく楽しんで説明した。試しに持ち上げると、それは筆箱ぐらい軽かった。顔の近くに持って来ると糸のほつれが見えたが、それでいてふわふわと餅のように柔らかく、クツキーのような

甘い香りがした。七年間、彼女に大切にされていたのが伝わる優しい手触りだった。

五月。転校生が転校生のままいられる時間はそう長くない。よそ者であった彼女が、その人生を垣間見せる瞬間は、図らずも訪れた。

それは、事故だった。教室から廊下へ猛ダッシュで走っていた男子が、廊下を歩いていたら西野さんにごつかり、彼女が大きく倒れてしまったのだ。彼女は立ち上がり、笑顔でだいじょぶだよっ、と言いながら教室へ戻った。

しかし、その場にいた全員が、彼女を見て鳥肌が立つほどに慄然した。男子がぶつかった拍子に、転んだ彼女の頭からカツラが取れたのである。カツラが取れた彼女の頭には、薄く、散り散りになった髪が剥き出しになっていた。何事もなかったかのように笑い、カツラをはめ直した西野さんの笑顔に、僕達は何も言うことが出来なかった。駆け付けた先生は、その男子に詰め寄り、他のクラスにも聞こえる程の大声で彼を怒鳴りつけた。怒り

に溢れていて、けれどどこか寂しさの覗く、初めて見る顔だった。

放課後、先生は西野さん以外のクラス全員を集めた。先生は、厚い雲のように渋い顔をして、僕らを見つめていた。何の話か、僕は大体察していた。しかし、先生が告げたのは、誰も予想していなかったことだった。

「西野は、修学旅行に、行けない」

思わず生まれたクラスのどよめきを他所に先生は、西野さんについて語り始めた。

西野さんは今までずっと、闘病生活を送っていたのだ。肺に大きな病気が見つかった西野さんは、八歳にして手術を受けて、今まで学校にも行かずにずっとつらいリハビリをこなしていた。僕らが二年生だった頃の夏、三年の春の転入を見据えて必死に勉強とリハビリに取り組む西野さんの姿を、先生は見ていた。だからこそ、先生は怒鳴ったのだと聞いた。僕は、全てに合点がいった。クマのぬいぐるみは、彼女の手術後のお祝いのお品で

あったこと。カツラで隠された頭は、薬の副作用であったこと。僕は、唯一先生に呼ばれず、空席になっている隣の席をじっと見つめた。

次の日から、僕はぎこちなさを覚えた。彼女がどんな辛いリハビリを経てここに居て、どんな思いで笑っているのか。それを想像するだけで、彼女に気を遣わずには居られなかったからだ。そして僕は、彼女の力になろうとした。移動授業の時は転ばないように彼女の荷物を代わりに持つてきたりすることで、自分にできることを精一杯やった。しかし、それと裏腹に、西野さんの顔は曇っていた。彼女は、「病人」として気を遣われるのが、逆に嫌だと言う。ならばどうすれば彼女の力になれるのか。その時の僕は、濃い霧の中を歩くような無力感に包まれていた。そして僕は、あることを思いついた。

修学旅行出発の前日、先生が説明を終えると同時に僕は手を挙げ、ある提案をした。西

野さんのクマのぬいぐるみを旅行へ持って行き、西野さんの代わりとして僕達で思い出を作るといふものである、この話は、事前に西野さんと先生から許可は貰っていた。

僕が提案を述べると、クラスの皆はすぐに同意をしてくれた。西野さんとの想い出を作りたいかったのは、皆一緒だったのだ。

そして次の日から、「西野さん」を含めたクラス「全員」での修学旅行が始まった。彼女のぬいぐるみは、班から班へと手渡されて行った。清水寺の前で、女子グループが数名集まって写真を撮っている時、彼女はその中心に居た。金閣寺の前で、少し照れながらぬいぐるみを持つ男子が映る写真の中にも、彼女は居た。最終日に撮った僕ら全員が映るクラス写真の中心にも、彼女は居た。

旅行から帰ってきた僕らは、西野さんに、ぬいぐるみと沢山の写真を手渡した。どの写真にも、彼女のぬいぐるみは映っていた。皆の笑顔にあてられて、ぬいぐるみが微笑んで

いるように見える写真ばかりだった。

それを受け取った西野さんは、泣き出した。直後、今度は嬉しそうに笑った。今までは笑顔で隠していたけれど、本当は誰よりも修学旅行を楽しみにしていたのは彼女だったのだ。ありがとう、ありがとう、と泣きながら笑う彼女を、クラス皆の笑顔が囲んでいた。

そして、ひとしきり泣いて笑った彼女は、皆に向かって大きな声で誓った。いつか病気が治ったら、皆と旅行に行きたい、と。そこに居たのは病人なんかではなく、たった一人の、かけがえのないクラスメイトだった。

(埼玉県さいたま市)

【無断転載を禁ず】